

自然を語る会

2019年7月20日（土） 10:00～12:00

於：東京ボランティア・市民活動センター

参加者：25名

担当：深串泰光さん（森林インストラクター）

## 『ボルネオの熱帯雨林と問題』

今月の自然を語る会は、会員さんの日頃の活動を紹介していただくシリーズ企画の第一回目。この日は当会の会員で森林インストラクターの深串泰光さん（愛称：クッシーさん）から『ボルネオの熱帯雨林と問題』というテーマでボルネオの豊かな生態系から環境問題について紹介していただきました。これまでに何度もボルネオを訪問されている深串さん。ボルネオの「今」を伝えるわかりやすいスライドとテキスト、そして貴重な原産品の数々を紹介して下さいました。

はじめに紹介して下さいしたのは熱帯雨林の特徴について。熱帯雨林の土壌は非常に薄くて平均30cmしかないのだそうです。そのため板根（根が横に伸びる）や枝根が発達しているのが大きな特徴です。林冠の高さは約30mで動植物のほとんどがそこで暮らし、生物（種）の多様性のレベルが非常に高いとのこと。ボルネオに棲息している植物の優占種は高木・突出木のフタバガキ科植物（570種中260種）。ケランガス（熱帯ヒース林：貧栄養の砂質土壌にできた森林）や食虫植物（ウツボカズラ）、発達したマングローブ（世界のマングローブ面積の42%）、世界最大の花ラフレシア（開花期間は1週間）、ブーメランのような羽根のついたアルソミトラ・マクロカルパの種（写真）など、日本ではあまり見ることができない貴重で不思議な植物をたくさん紹介していただきました。棲息している動物も、有名なオランウータン、ボルネオ固有種のテングザル、ボルネオゾウ（絶滅危惧種）、世界一大きなテイオウゼミ、オオカメムシにアトラスオオカブトなど、とにかく多種多様な不思議な生物が数多く暮らしていることがわかりました。

生態系の宝庫のようなボルネオですが、近年、熱帯雨林の面積は急速に減少しているとのこと。主な理由は3つ。①輸出用の木材を調達するための過剰な伐採や違法伐採。②パーム油を搾り取るためのアブラヤシ農園の開発。③紙の原料として短期間に伐採できる成長の早いアカシア植林地への転換。パーム油は世界で最も多く生産される植物油であり、また日本が輸入しているコピー用紙の約8割はインドネシアから来ているとも言われています。

しかし②③のようなプランテーションと呼ばれる植林地は、一見緑の森に見えても単一の樹種ばかりを植えた生物多様性の乏しい、自然の森とは全く異なる環境になってしまうとのこと。木材や植物油、紙製品はいずれも今や私たちの日常生活にとって欠かせないものですが、いつも何気なく使っている紙や木材製品が、貴重な自然を壊し、野生生物達の生息地を奪っている可能性があることを、認識しなければいけないということを教えていただきました。また私たちができることとして、①持続可能な農法で作られたパーム畑を使用した商品を買う（フェアトレード商品など）。②環境保全をしている団体を支援している企業

の商品を買う。③節度ある消費を心がける。このような心掛けが大切であることも学びました。講義の最中には、本物のフタバガキの種やラフレシアのつぼみの皮、アルソミトラ・マクロカルパの種やドングリからイリエワニ（大いに盛り上がりました!）などがテーブルを歩き来し、実際に実物を見て、触って、匂いを嗅ぎ、質感を感じることで、ボルネオを一層身近に感じることができました。最後のおさらいは参加者の皆様と深串さんから出題されたクイズに挑戦。参加者全員にボルネオのお土産も配られ、盛会のうちに終了しました。いつかボルネオに行ってみたい。（文責：柳澤）

